

②2953^p-1/2
②2484^p-3/2 表
②2487^p
未3分

②2862^p-7/3 20^p 秀起つ 元873^p
紀上162^p 25^p ②2860^p-1/2 12^p
2,861^p-1/8 紀上191^p

#上(生)153^p
宇165^p 紀上161^p
紀上162^p

と申し上げた。神代紀下第九段一書第六参

號いますし 第35表

といひ、妹を木花開耶姫、別名豊吾田津姫と

長狭は、答えて、
とお尋ねになつたのであろう。

のか
て、手際よく織つてゐる少女は、誰の子女な
難波の地に、八尋殿(大きな殿舎)を建て
あゝの波頭の立つてゐる浪速の海の上(の

たぶん、天孫は、

起つて、手玉もころころと織る少女は、誰の
子女か
あゝの秀起つてゐる浪穂の上に、八尋殿を
尋ねになつた。

天孫は、長狭へ事勝国勝長狭に、又こうお

冬を願ふ
② 28 38° - 1/2 古多 51°

視② 94° 2分
② 2484° 1/2の表 2.86.1° - 2/8

紀上 154° 5分

2230
心引く 元 789°
好意をよせる

照)

*

154° 4分

154° 5分

その後、皇孫は海辺に遊幸して、一人の美人を
ご覧になつた。

それは、あの木花開耶姫であつた。

皇孫は、その娘の輝くばかりの美しさに心引か

れて、言葉をおかけになり、

「おまえは誰の子かし

とお尋ねになつた。

娘は、

「妾は、大山祇神の子で、神吾田鹿葦津姫

亦の名を木花開耶姫と申します」

とお答えした。神代紀下第九段一書第二参照

大山祇神の神の女の名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毗売と

な。お、古今和歌集に仮名序に

こう記されてゐる。

難波津の歌は、帝の御初めなり（仁徳天

皇の御代の初めを祝つた歌である）

下難波津に咲くや木の花

又, 861^{P-3/8}

... 表紙 下に下す。 ^{びょうぶ} 屏風 絵なのだろうか。

・ カラー
・ 右頁の上半分に
大きくはみ出して
掲載下さい。

・ 明るく、鮮明に
お願いします。



左 屏風 どうぞといんよう

・ 1891年~1975年
・ 死後50年以上
経つている。
・ 著作権許諾不要。

1309

・ どうぞといんよう

1409

第366回

この時の主とて ^{ひめ} 木花開耶姫

『堂本印象』具象画編、京都書院、昭和55年8月15日発行、32頁参照。

112^P

堂本 32

古今

小町 183 上 85

吟51

2,861-4/8

2861-3/8 18

冬ニもり
いづれに
いづれに
いづれに

今は春べと 咲くや木の花

難波津に、梅の花が咲いています。今こ

そ春が来たとして、梅の花が咲いています

*「冬ニもり」は次の句の「春」の枕詞である。

和歌集 中仮名序には 注記して、次のようにも述べら

れてゐる。 大鷦鷯 帝 難波津にて皇子と聞えける

時、春宮 意図 難波津にて皇子と聞えける

位に即きたまはで、三年になりけりは、王

仁へ百濟から歸化した学者」といふ人の訝り

思ひて、よみて奉りける歌なり。木の花は梅

の花をいふなるべし

とある。

この注記の通りだとすると、難波津の歌

は、仁徳天皇が帝位につかぬる以前に作ら

たことになり、難波津の歌は、帝の

御初めなり」という文言と矛盾する

思われぬ。

思ふ

■「それとも、何か意図するところがあつて、

一部省略して記されてゐるのだろうか。

意図 8行

みえ 初 218 統 1561 2822

2,861P-5/8

5/10の下

紀と386P 12行 宮室を 道に 2816P 2820P

例えは、
①大鷦鷯の帝が、難波津において日刃日本
国に（近畿地方）を統治しおられた時、
一、一、菟道（太宰府）の宇治天皇が、帝位を
辞退したいと申され、互いに譲りあわれた。
そんな時、王仁が訝り思ひ、一、一、仁徳天
皇にそれとなく意見を申し上げる為、
難波津の歌をよんで奉った。
この時の「木の花」は、梅の花のことであ
つた。（古今集）仮名序参照）
・もしかしたら、王仁は、
宇治天皇の申し出を受け入れになつたら
どうでしょう。難波津の梅の花が、今こそ
春が来たとして、咲いてゐるではありませんか
と申し上げたのかも知れない。
②その後、仁徳天皇は、九州・中国・近畿地
方を統轄する倭王としての帝位につかれた。
そして、仁徳天皇は、天上の国から難波の
地へ降臨された際、美しい木花開耶
姫を見初められた。

（仁徳天皇）

2.861^P-6/8

天つき
改行

前85

そんな時、王仁か、再び難波津の歌を
奉ったのではなかうか。

この時の「木の花」は、木花開耶姫および

木の花のことを指していたのかも知れない

などと想像されるが、全く定かでないこと

である。

第366回 木花開耶姫 参照

2.860^P 木花開耶姫

*

$$\equiv x$$

② 2859 - 4/4 259

2,861 -

鹿茸津液 紀上14135行

⑤ 2870^{0-3/3}

⑤ $28612 \frac{3}{8} 129$

と
り
う
こ
と
な
の
だ
ろ
う
か
（第35表参照）

名を継承していただく、

野間岬あたりでは、大山津見の傍系筋かその

(四) 一方、薩摩国阿多あどの笠沙かささの御前ごぜん（加世田かよだの

た
さ
あ
い
文
文
28
み - 3/6
さ - 16
か
せ
だ

孫加、代々、大山津見の名を受け継い
ていつ

(国) 難政ありへ移り住み、
その子

薩摩国阿多
の大山津見
の長子系が
母の根

あ
か
い
た
ら
下

岩波書店、五六九頁、補注二一—一六参照)

という。^(一)
『日本書紀』(上) 日本
吉典文学大系、

歟七等加志君和多利、などとある

七月条、大隅隼人、始羅郡少領外從七位下

鷹白、加志公鳥麻呂の名があり、同天平元年

であらう。
 続紀、神護景雲三年条に、
 薩摩公

鹿葺津姫の力シは、九州南部の地名

に、ついで、この説文を
いっている。

名である神吾田鹿茸津姫(鹿茸津姫ともいう)

さらに参考文献に述べると、木花開耶姫の別

ニクはなまきりやういめ
べつ

コクヨ ケ-20 20×20

⑦ 2860^p - 5/5

「というこ」 前未 2.861 P-8/8 紀上569 注16 大元大山祇神 阿曇 紀上95 海神の子とある。②487 紀上558 海神(ぬたつみ) 云2377 几上紀502 注4「(か)い(ま)」 紀上558 海神(ぬたつみ) 云2377

木加志氏の子孫達が、薩摩半島一帯に分散して住んだの(要検討) かも知れない

ともあ水、(西方に向かつて突出している半島の先端)

へ九州北部の志賀島には、海神を祖とする

阿曇氏が居り、九州南部の吾田の笠狭

の御崎(野間半島)一帯には、大山祇(山を

つかさどる神)を祖とする一族の鹿葦氏(後の

加志氏)が居た

というこのようである。

大山祇神の子である木花開耶姫は、別名

へ大山祇神の子である木花開耶姫は、別名

神吾田鹿葦津姫と呼ばれた

とも思われるのであろうと推察される。

*

かしはら 286^p-7/8 12行
 注目 2870^p-1/3 4行
 2,862^p-1/3
 免上141^p 宇治51^p 5行

とうで、おぶん奇妙な（こと）なから、神代紀下第

九段本文に、

「妾（めかけ）木花開耶姫（きはなひらき）は是（こゝ）天神の、大山祇

神を娶（めと）きて、生（な）ましめたる兒（こ）なりし

と記（し）されてゐる。

すなわち、何（なん）と、大山祇神（おほやまつみのかみ）を女性（めかけ）と見倣（みな）して

おり注目（ちゅうもく）される。

かしはら、臆測（おくそく）なから

へ山の神（かみ）は女性（めかけ）であるところから、

これに引（ひ）かれて、大山祇神（おほやまつみのかみ）（山（やま）をつかさどる神（かみ）

を女性（めかけ）とする見方（みかた）が生（な）じた

という（こと）なの（か）も知（し）れない。

*

由2861⁸-1/8 16⁹

由2861⁸-1/8

2861⁸-1/8
木花開耶姫

磐長姫

2,862⁸-2/3

紀上15⁸
紀小100⁸上

あや
谷ふ
紀上15⁸8⁹

へ皇孫は、私の女子(達)を妻にしたいと

長狭は答えて云ふところにおいて既述

と云つた。(第四十八章へ木花開耶姫の項

・姉を磐長姫
・妹を木花開耶姫(神吾田鹿葺津姫)

には二人の女子があらう。前述の通り、大山祇神

花開耶姫を妻にしたいと思つたのだつた。

皇孫は、いうまでもなく大山祇神の女子木

余の妻にしようと思ふ

と云つた。(神代紀下第九段一書第二参照)

そこで皇孫は、大山祇神に向つて、

余は、お前の女子に会つたと云つた。

どうか、私の父大山祇神に御下問くださ

余は、お前を妻にしようと思ふか、どう

にしたいとお願ひになつた。

ここに皇孫は、木花開耶姫を妻に一夜妻に

紀94

おがめ 乙 思召す 320 紀上154^P注5 国中で第1の美人

2,862^P-3/3

こと

紀上154^P 紀94^P

望んでおいでになる。ここの早谷山にいた大山祇神は、いたく歡喜ひ二人の女子に白机の飲食物を持たせて奉進つた。神代紀下第九段一書第二。神代記参照。それは、皇孫にとつて、全く思ひかけないことであつた。

米

時に、皇孫は、姉の磐長姫の方を醜いとお思ひになり、お召しにならず返してしまわ小た。

皇孫は、妹の木花開耶姫を有国色(国中で第一の美人)と思ひ召され、お引になつて幸さ小た(交合さ小た)。(神代紀下第九段一書第二参照)

ここのところ、古事記には、こう記されてゐる。

「かれいかして、その姉はいと凶醜きによ

こと

①

⑤ 2868¹⁻²/₂

電上に記すの事
日本神話で天皇大神の御

天つち
改行

2,863^P-1/2

仁徳2年に
船え媛命を皇后とす
いはのひめ
船え媛命を皇后とす

⑤ 2874¹⁻²/₂

記(思)95²⁹

ひとすむ
一夜婚ひ
記(思)95^P

りて、見^み畏^{おそ}みて返^{かへ}し送り、ただその弟^{あとの}木花^{このはな}之^の
佐^さ久^く夜^や毗^ひ売^めのみを留^{とど}めて、一夜^{ひとよ}婚^{よめ}ひしたまひ

き

とある。

■ なお、

7

日

婚

は、

対象

が

一夜

妻

で

ある

とき

に

わ

れる

語

で、

日

ま

ぐ

は

ふ

ら

へ

交

あ

と

いう。

(

古

事

記

し

新

朝

社、

九

五

参

照

つ

まり

へ

瓊

瓊

杵

尊

(

仁

徳

天

皇

に

は、

媛

か

あ

り

い

木

花

開

耶

姫

は

一

と

解

さ

れ

る。

(

仁

徳

紀

二

年

三

こ

れ

は、

極

め

て

重

要

な

と

で

あ

よく

知

ら

れ

て

い

る

従

来

の

一

般

へ

後

代

の

天

皇

は

瓊

瓊

杵

尊

と、

木

花

開

耶

姫

を

祖

と

し

て

い

る

と

い

う

こ

と

に

な

る。

い

、

と

考

え

た

い。

(

第

一

表

参

照

。詳

し

く

は

追

「も」も 前頁 154 95
はかなく 2864-2/3
154 95

はかなく 2864-2/3
磐石 1836
紀上 154
2,863^P-2/2

紀上 154^P
井上 146^P
宇治 60
一元 2861-2/8 175

ところから 2862-2/3
154

い 追い 述べて ゆきた い
■ とも あれ 何と、木花開耶姫は、その一夜
ト して 妊娠して しまわれたのだった。(記・
紀)

*

■ 他方 姉の 磐長姫 は、皇孫が お召し にならなかつたものだから、非常に 取いて、呪いを かけ

こう 言われた。(以下、日本書紀と神代下

第九段一書第二参照)

「も」も、天孫が私をお斥けにならな

お召し になつて おられたら、瓊瓊杵尊の御子

は 寿命が長く、磐石のように、いつまでも

た でありましように。

「かし、いま、そう なさらないで ただ妹だ

けをお召し 上げになつた。だから、瓊瓊杵尊

の御子の 生命は、かならず 木の花のように 散

り 落ちる こと でしょう

「も」も 一説によれば、磐長姫は、恥に 恨

ゆゑに225Pには
由縁由縁俄か 紀上154P新
21709P

記(墨)95P 2行へ

大2400
2.864^P 1/2

記(墨)95P
記(茶)69P
239P(原文)

み、唾を吐き廻りて、こう申された。
「この世の青人草は、木の花のようにつ
ろいやすく、俄かに生命おとろえよう
・そして、これが世の人の短命の由縁である
という。」
神代紀下第九段一書第二参照
「このところ、古事記には、次のよう
に記されている。
「かいて、大山津見の神、石長比売を返
したまひにやりて、いたく恥ぢ、白く送り
て言ひく、
「わが女を二並べて立て奉りしゆゑは、石
長比売を使はさば、天つ神の御子の命は、雪
零り風吹くとも、恒に石のごとく常に堅に動
かず坐さむ。また、木花佐久夜毗売を使は
さば、木の花の栄ゆるかごと栄え坐さむと、
誓ひて貢進りき。かく石長比売を返さしめ
て、独り木花佐久夜毗売のみを留めたまひ
つれば、天つ神の御子の御寿は、木の花のあ

H30(2018)7.22(日)~7.23(4回)
令和2(2020)3.7(土) 主とたん 582
~3.4(4回) 極端 ぼろぼろ

1か 由 2863¹-²/₂ 164
にたいえ 2864¹-²/₂

極端ない 2860¹-²/₂ 4行

均等

3/8 下 3/8
3/4

(米)

われる。(第1表参照)

まひ(雨と次の雨との間)のみ坐さむ
かれ、ここにちて、今に至るまでに、天
皇命等の御命長くあらざるぞ
とある。
すなわち、要約すると、
この時以前の天神の御命は、非常に長かつ
た。だが、この時以降の天神の子孫達(天皇
命等)の御命は、はかなくも極めて短くなっ
てしまった。
と解される。
恐らく、この説話は、
①倭国では、これまで(元神天皇の御代まで)
長男が襲名して、名と年と地位とを次々に受
け継いでいたので、天皇ははたまたま皇族
等の御命は非常に長かった。
②しかし、この時(仁徳天皇の時)以後、天
皇命等の御命は一代限りとなり、以前に比
ると極端に短くなつてしまった、
ということを示唆しているのであろう、と思
われる。

2. 865^P-1/2

「一天皇一世代」の思想の溯及

■とはいえ、この「一天皇一世代」の思想は、
実はずつと後代に生れたものであつて、
ただたんに、その思想を仁徳朝にまで溯及さ
せて記述しただけのことなのかも知れない。

■例えば、いわゆる「倭の五王」中の「讃
に ついて述べる」と、
(倭の六王)

①大鷦鷯天皇(仁徳天皇)

②仁徳天皇の長男である去來徳別天皇(履
中天皇)

の両天皇は共に、――その時代にはいわ
ば当然のこととして、同じ名「讃」と称され
たのであろう。

■つまり、
履中天皇は本来、大鷦鷯天皇
「讃」を襲名して、名と年と位とを受け継が

れたのであろう✓

令和元(2019)7.22(火)~7.24(3日)

④ 2864⁸-3/2

④ 2862⁸-3/2

2,865⁸-3/2

同次
飯豊天皇
④ 2922

きゅうらい 562⁸
旧来 継来。古くから

雄略前 紀小本 479年 } 5世紀末
記 489年

F 7/24
7/23

と想到される。(第四十九章へ倭の六王の
項において詳述したい)。
■しかし、履中天皇以降の倭王の継承は、複
雑極まりない。(以下、第一表参照)
■そして、さらに後代となつて二朝時代
(第四表参照)へ突入してからはいよいよ
旧来の王位継承法とは懸け離れたものとなつ
ていったようである。
■そこで、記紀の編纂者達は、
(1) 仁徳天皇以後の各天皇について、
天皇の場合を除き、
「一天皇一世代」の思想
にのっとりて記述したのである。(第一表参照)
(2) そしてこのような実情を明らかにする為、
長姫と木花開耶姫との説話を挿入したの
ろう、
と推察される。
* 天皇命等の御命が短くなった由来

み二紀上
胤 158
8行
一書五

紀上158⁸行

紀上142^本文
宇治谷上61⁷
紀小192^本文
100^本文

いかにうさ
念り恨んて 3行

紀上142¹⁵⁸3行

2,866^P

紀上100^P 紀上155^P

朝7 紀上158³行 紀小100^P
宇治谷60^T

3038^{1/2}

な
り
なら
天神の血筋を引いていな子
私のみごもつた御子か、もし天神の胤で
天神の血筋を引いていな子
娘は、戸の無い日無戸室を作つて誓い
その言葉を聞き、大いに念り恨んだ木花開
で、ないのてはないか
させることかできようか。それは私の子
いくら天神の子でも、どうして一晩で妊
する、皇孫は、嘲つてこう言われた。
い、おうかがいいたします
ますか、勝手に生みまっつてはならないと思
し、おうかがいいたします
申し上げた。
私は、いま天孫の御子のみごもつており

鹿茸津姫は、皇孫にお目にかかつて、こう
申し上げた。
私は、いま天孫の御子のみごもつており

火の中から生れた彦火火出見尊
(無理やりつないだ系譜)
このはなの土くやびめかああた
木花開耶姫(神吾田)

みニ紀上158⁸8⁹ 肩一書5

紀上142²本文 156²1³の²2¹ニと

紀上142²

2,867^P

紀上188² 紀上168²

元上142² 煙の末より 取り出つる

かならず死産になりまよう。
もし本当の天神の胤ならば、
↑↑↑↑火も害

うことはできますまい

と言うと、その産室の中へ入って火をつけ、

無戸室を焼いてしまわれた。(神代紀下第九

段本文、一書第二・五・六。神代記参照)

その²炎のはじめて立ち昇る²煙の末²は

ら生れた御子を火闌降命と申し上げる。つぎ

に熱を避けておられたときに生れた御子を彦

火出見尊と申し上げる。つぎに生れた御子

を火明命と申し上げる。(神代紀下第九段本文)

なお、²記紀が述べる系図によると、次のと

おりである。²神武天皇の祖父

彦火火出見²彦波瀲武鸕鷀草葺不合

彦火火出見²神武天皇

要するに、少々ややこしいが、

無戸室を焼いた時に炎から生れたという

彦火火出見尊の孫は、全く同名の彦火火出見

尊²神武天皇である

という。

米

〇もつとも、曰神代紀下第九段本文一書第
 八〇および曰古事記の記述を詳細に見ると
 〇それ、それ、多少の差異がある。
 〇例えは、神代紀下第九段一書第二には、こ
 う記されてゐる。
 〇木花開耶姫は、大へん恥じて無戸室(出
 入口のない部屋)を作り、
 〇私のみまつてゐる御子か、もし他の神
 の子ならば、必ず不幸なことになるであらう。
 〇これ、実に天孫の子ならば、必ず無事にお生
 にならう。
 〇と誓つて言ふと、――――空の中へ入り、
 火をつけて其の空を焼いてしまわせた。
 〇その火の出は、その時に生まれた御子を火
 酢芹命と申し上げる。次に火の盛んな時に生
 まれた御子を火明命と申し上げる。次に生ま
 れた御子を火出見尊、別名火折尊と申し
 上げる。
 〇という。

掲載
記載

2863¹-1/2
144.7.5(国)

2868¹-3/2
3060¹-1/6

紀上158¹末行
162¹6行
1076¹

第36表 神代紀下第九段一書第五、六参照

本文	第二	第三	第五	第六	第七	第八	記*
火明命	火酢芹命	火明命	火明命	火酢芹命	火明命	火酢芹命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命
彦火火出見尊	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命	火明命

このように、生まれ順序や、名前などが
微妙に異なっている。(第36表参照)
豊田津姫(木花開耶姫)は、皇孫を恨んで
言葉を交そうと、さ小なかつた、という。

① かし、いざれにせよ
② さらに先述の通り
③ また、皇孫瓊杵尊の本妻の子、およびそ

1299 *印を付した一書・記では、火明命を
瓊杵尊の兄弟としている
1300 『日本書紀』(上) 日本古典文学大系 岩波書店
昭和43年6月10日(第2刷)発行 569-570頁
参照

2867
 煙の
 末
 か
 ら
 生
 ま
 れ
 た
 御
 子
 を
 赤
 い
 糸
 〆

まじか 正裁 紀上106° 35行 2517-8 紀上162°
 類似 参考 2518° 33
 3037 月室同文 古重書 異色の人材 2111P
 2.870^{P-1/3}
 紀上141° 162° 嫌疑 2704°
 大 けん主 かがか 大 けん主 かがか
 おおまぬ 大旨 概云 282° 重要 2863-2 注目 2862-1/3
 記号 95° 記号 68° 不審 2860° 4行

ところであつ
 かなり奇妙な記事があつ

て不審に思われる
 神代記に下第九段本文一書第八を見

木花佐久夜毗売の条、お

瑠璃杵尊の一夜妻となつてみごもつた木

花開耶姫は、嫌疑をかけられたので無戸室を伴ひ

中へ入つて火をつけた。その時、彦

火火出見尊(神武天皇の祖父)がお生まれになつた

という話か、こまごまと、繰返し繰返し述

する意図があつたのだらうか。

神代記下第九段一書第七に、極めて異色のこ

とか記されてゐる。

千幡姫。一に云はく、高皇産靈尊の女天萬栲幡
 の兒玉依姫命と云はく、高皇産靈尊の兒萬幡姫
 此の神、天忍骨命(正

母のをりのみせ
火折命
紀上158末45

注12 祓織
火折

赤柳内を、
太いゴキに下

又.870 P-2/3

紀上162^P

紀上162^P
紀上106^P 38^P, 134^P
③ 3038
-1/2

哉吾勝勝速日天忍徳耳尊のこと。天神天皇
と考えたの妃と爲りて、兒天照火
火置瀬尊（瓊瓊杵尊の兄弟と解した）を生
みまつる。
ある
一に云はく、勝速日命の兒天大耳尊（多分
天忍徳耳尊にあたりという。末代の天神天皇
のことな）此の神、丹鳥姫（意
味不明）を娶りて、兒火瓊瓊杵尊（仁徳天皇
のことな）であらう）を生みまつるといふ。
ある
一に云はく、神皇產靈尊の女栲幡杵姫、兒
火瓊瓊杵尊を生みまつるといふ。
ある
一に云はく、天杵瀬命（天照杵火火置瀬尊
と同じ。杵瀬は、置瀬に同じか、という）、
あまたつみの
吾田津姫を娶りて、兒火明命を生みまつる。
ある
次に火夜織命（火折命のこと）。次に彦火火
出見尊といひし
とある
たことが記されてゐる。（「日本書紀
（上）日本古典文学大系、岩波書店、一六二頁、
注四十二参照）
つまり、何と、

2,870⁷-3/3

④2861245

豊吾田津姫 紀上162³斤

神吾田鹿葦津姫 紀上154⁴

神吾田津姫・鹿葦津姫 紀上14¹ 吾田鹿葦津姫 紀上154⁴ 未

太いゴチにー下 (さい)

あまのおーほみのみこと みーあまのまほおまのまこと
 ①天忍穂耳尊の兒天彦火火置瓊尊は、吾
 田津姫を娶って、彦火火出見尊を生んだ

というのである。

もーかーたら、

①瓊瓊杵尊の一夜妻となつた神吾田津姫(豊
 吾田津姫、鹿葦津姫、神吾田鹿葦津姫、吾田

鹿葦津姫、木花開耶姫)と、
 ②天彦火火置瓊尊の妻となつた吾田津姫と

は、
 全く別の女性であるにもかかわらず、あえて

まぎらわしく記述をわけていいるのかも知れな

述べる

い。

思らく、

彦火火出見尊の父は、瓊瓊杵尊でな

くて、
 天彦火火置瓊尊なの

う

と想像される。

*

* ミニに、「表参照」と記さないこと。
 まだ、早すぎる。

記2) 184 202 紀上622 紀上450 紀上364

3037 3038 同 2.871^P-1/2

前頁1~2行

この物語では、
神話中の天忍穂耳尊の兒曰(天)之杵火火
置瀬尊曰
日人皇の御世の応神天皇の兒曰(稚)野毛二
派皇子曰(継体天皇の祖)
の二者は同一人物なのであろう、と考えてみ
ることはたゞしい。
之杵火火と、野毛派派とは、極め
て近い音であるように思われる
なお、
之杵火火は、ノギホホ。ニギホホ(饒穂
穗)の転か。置瀬は、オキセ。オキは、奥。
セは、サ(神穂)の転か
と曰う。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系
岩波書店、一六二頁、注七参照)
因みに述べると、
応神紀二年条に、曰稚野毛二派皇子曰
安康即位前紀に、曰稚野毛二岐皇子曰
応神記に、曰若沼毛二侯王曰若野毛二侯

前頁 15行

2, 871^P - 3/2

紀上622^P 紀上440^P 紀上434^P 紀上622, 74^P 紀上221^P 紀上

店、六二二頁、補注一〇一二参照)

*

王 日本 紀十三所引の上宮記に、日若野毛二侯王
とある。
稚野毛二派皇子は、允恭皇后忍坂大中
姫・同妃永通郎姫らの父で、継体天皇の祖と
され、姓氏録に息長真人。山道真人。坂田酒
人真人。ハ多真人(以上左京皇別)、息長丹
生真人(右京皇別)、坂田宿禰(右京皇別)。
息長連(右京皇別)の祖とある。
(7 日本書紀(上) 日本古典文学大系、岩波書

④ $2870' - \frac{1}{3}$

137